

O2-020

旭川市 3 歳 6 か月児健診への Spot Vision Screener 導入前後における弱視の診断数の変化と、就学時健診の視力検査結果の変化

山本 朝日¹、古川 卓朗¹、中嶋 雅秀¹、
西川 典子²、旭川市 子育て支援部 およこ応援課 こども健康係
旭川市教育委員会 学校保健課

¹ 市立旭川病院 小児科

² 旭川医科大学 眼科学講座

【はじめに】

Spot Vision Screener(以下 SVS)は、屈折検査機器の一種で、弱視の危険因子となる斜視や屈折異常を簡便で非侵襲的にスクリーニングする機器である。本邦では 3 歳児健診への SVS 導入が進みつつあるが、これによる長期的な視力検査結果の改善は検証されていない。旭川市では 2018 年 5 月より 3 歳 6 か月健診に SVS が導入されているが、SVS 導入前後での 3 歳 6 か月健診における弱視の診断数の変化、さらに、就学時健診における視力検査結果の変化について検討した。

【対象と方法】

2017 年度から 2019 年度に旭川市 3 歳 6 か月児健診を受診した児を対象とし、後方視的に検討した。健診では、日常生活での視力に関する懸念事項の有無と、自宅で実施したランドルト環字ひとつ視力標による視力検査結果が診察の参考とされていた。2018 年 5 月以降は、健診会場で SVS を実施し、異常と判定された場合は精健票を発行して眼科受診を勧めた。眼科受診により「弱視(可能性も含む)」と診断された児の人数を受診報告書より集計し、SVS 導入前(2017 年度)と SVS 導入後(2019 年度)で比較した。さらに、2019 年度から 2021 年度の就学時健診の視力検査結果を集計し、3 歳 6 か月健診に SVS が導入される前の学年(2019 年度)と、導入された後の学年(2021 年度)で比較した。

【結果】

3 歳 6 か月健診では、「視覚」に関して精健票を発行された児は、SVS 導入前：受診者 2,232 名中 195 名(8.7%)、導入後：受診者 1,923 名中 290 名(15.1%)と増加していた。眼科受診により「弱視(可能性も含む)」と診断された児は、SVS 導入前：受診者 2,232 名中 20 名(0.9%)、SVS 導入後：受診者 1,923 名中 32 名(1.7%)と増加していた。就学時健診では、裸眼もしくは矯正視力で 0.3 未満と判定された児は、SVS 導入前の学年：受診者 2,366 名中右眼 44 名(1.9%)・左眼 34 名(1.4%)、SVS 導入後の学年：受診者 2,254 名中右眼 10 名(0.4%)・左眼 15 名(0.7%)で、SVS 導入後の学年で減少していた。

【考察】

3 歳 6 か月健診では、SVS 導入後に「視覚」に関する精健票の発行数が増加し、受診者に占める「弱視(可能性も含む)」と診断された児は増加していた。就学時健診では、SVS を導入した学年以降で、受診者に占める視力 0.3 未満と判定された児は減少していた。3 歳 6 か月健診への SVS 導入により、就学時点での弱視の児を減少させることができる可能性が示唆された。

O2-021

学校施設における排便我慢と小児便秘の関連調査

— 学校トイレ 3K(臭い・汚い・暗い)整備後の小児便秘の実態

大澤 まみ¹、中島 伸子²、亀岡 雅紀³

¹ 新潟大学医学部保健学科

² 新潟大学大学院教育実践学研究所

³ 新潟大学大学院教育支援機構

【目的】

学校トイレでの排便回避は、小児慢性機能性便秘症の大きな要因であることが報告されている(小児慢性機能性便秘症ガイドライン)。これまでは学校トイレ 3K(臭い・汚い・暗い)が排便回避の原因であったが、近年は老朽化やコロナウイルス感染症対策に伴い、整備されつつある。にもかかわらず、小児の慢性便秘は解決に至っていない。そこで、本研究では小児の慢性便秘に関する最新の課題を探る目的で、トイレ改修を行った学校施設における生徒の排便状況と、学校トイレに対する心理的ストレスを調査した。

【方法】

令和 3 年にトイレ改修した A 県 B 中学校の生徒(回収率 38%、n=135)を対象に、便通や学校トイレの利用状況に関する無記名自記式質問 Web 調査を行った。便通については、小児用日本語版便秘評価尺度(CAS:リッカート尺度(0-2点))を用いて、計 5 点以上を「便秘群」と定義した。学校トイレの利用状況は、排便我慢や心理的ストレス(不安感・イライラ)を質問した。便秘群と非便秘群の性差やトイレ利用状況はカイ二乗検定で関連性をみた(有意水準 $p < 0.05$)。本研究(新潟大学倫理審査委員会承認)は本学異分野連携融合研究助成(令和 4 年度 U-go グラント)に拠り行われた。

【結果】

トイレ改修施設の生徒の便秘群は 34.9%(有効回答:n=106)であった。便秘群と非便秘群間に性差は認めなかった($p=0.39$)。学校トイレでの排便我慢とストレスの頻度は、非便秘群に比べて便秘群の方が有意に多かった($p < 0.05$)。学校トイレで排便を我慢する理由(有効回答 n=57、複数選択)として「周りにいる人が気になる(47.4%)」、「恥ずかしい(43.9%)」、「便をする時の音が気になる(43.9%)」が上位を占めた。

【考察】

本研究で便秘と定義された生徒は、松浦ら(1999 年 小児保健研究)が調査した中学生の便秘自覚率 18.2% に比べて増加していた。また便秘の生徒には、学校トイレでの対人ストレスと有意に関連していた。したがって、トイレ改修に関わらず排便回避が多い原因として、生徒同士の羞恥心が根底にあると推測された。本研究により、小児慢性機能性便秘症への治療アプローチとしては、従来のトイレ 3K 対策のみならず、3K プラス「S(羞恥心)」にも着目した心理的な排泄ストレスへの軽減が有効と考えられる。今後は羞恥心を軽減する排便教育や、排泄行為に伴う対人ストレスに配慮したトイレ環境整備が課題と考えられた。